

大学院指導における「研究支援センター」 の役割と可能性

2月19日（月）

東洋大学白山キャンパス

埋橋 孝文（同志社大学社会学部）

センターのHP <http://gpsw.doshisha.ac.jp/index.html>

基礎データ 1

同志社大学社会学部社会福祉学科

- 2005年4月改組で発足（それまでは社会学科社会福祉学専攻）
- 社会学部は5学科制（社会福祉学科、社会学科、教育文化学科、メディア学科、教育文化学科）
- 学生1学年定員数93⇒98
- 教員数11（任期付き助教1名を含む）、
 - うち大学院担当教員7名
 - 60代4名、50代4名、40代2名、30代1名、
 - 男性6名、女性5名

伝統ある、新しい社会学部

2005年 社会学部誕生

(文学部からのれん分け)

設立年	社会福祉学科	1931年
	社会学科	1948年
	メディア学科	同上
	教育文化学科	同上
	産業関係学科	1966年

基礎データ 2

同志社大学大学院社会福祉学専攻

- 大学院修士課程1950年設置（日本で最初）－定員は現在1学年〇名
- 大学院博士後期課程1986年設置－定員は現在1学年〇名

留学院生の増加

M：2005年から5年間の在籍者割合の平均21%、2013年からの5年間⇒64%へ（2011－12年ごろに逆転）

D：同じく29%から45%へ

以下の2つはPD制度に代わるものとして数年前から実施

- 研究開発推進機構及び社会学部特任助教（3年任期）現在2名
（全学で5名、ほかに助手制度：全学で7名もあり）
- 大学院留学生特任助手（2年任期）現在2名（大学院研究科で毎年1名）

学位取得数（1993年～2004年）

	課程博士	論文博士	計
1993	2	-	2
1994	1	-	1
1995	1	1	2
1996	1	-	1
1997	-	-	0
1998	1	1	2
1999	1	-	1
2000	1	-	1
2001	-	1	1
2002	-	-	0
2003	1	-	1
2004	2	-	2

学位取得数（2005年～2016年）

	課程博士	論文博士	計
2005	2	-	2
2006	4	2	6
2007（大学院GP）	1	-	1
2008（大学院GP）	-	-	0
2009（大学院GP）	1	-	1
2010	6	-	6
2011	4	-	4
2012	2	-	2
2013	6	2	8
2014	2	1	3
2015	4	-	4
2016	5	-	5
2017	2	-	2

センターの発足

2007年度大学院GP（「組織的な大学院教育改革推進プログラム」）に採択（2009年度までの3年間）

教育プログラム名「国際的理論・実践循環型」教育システム」

3年間で〇〇万円の予算

3つの柱

1. 国際アドバイザー・コミッティーの設置
2. ケース・カンファレンスやスーパーバイザー養成講座
3. 学部付設（付置）の「教育・研究支援センター」

参考) <http://gpsw.doshisha.ac.jp/index.html>

※2007年12月8日センター開設記念講演会（岩田正美氏、武川正吾氏）

国際アドバイザー・委員会

D. Lee, Loyola Univ. (アメリカ)

J. Bradshaw, Univ. of York (イギリス)

P.G. Edebalk, University of Lund (スウェーデン)

宋 鄭府、尚志大学 (韓国)

第1回 (2008年3月11日)

第2回 (2008年12月12日)

大学院カリキュラムに関して有益なアドバイス

1) 必修科目、2) FWの位置づけ、3) 量的・質的研究法の重視、4) 前期課程の目的、5) マクロ政策研究の実習先確保の重要性、6) 他学部生の受け入れ、7) 主査決定時期の早期化

大学院GP事後評価結果（2011年1月）

4段階評価の上から2番目「目的はほぼ達成された」

優れた点 「具体的な継続が見込まれる『国際アドバイザー・コミッティー』の設置、『社会福祉教育・研究支援センター』設置、アジアとの連携の強化などは、国際性豊かな社会福祉学担当者養成の優れた教育モデルとしておおむね評価される」

改善を要する点 「5年一貫教育の実施及び博士前期課程、博士後期課程それぞれの大学院生の質の違いに即した教育改革、フィールドワーク実習の教育プログラムとしての実質化、本プログラムに即した学位授与数の増加策については、さらなる具体化に向けた検討が望まれる」

※2009年12月12日大学院GP総括シンポジウム（阿部志郎氏、大橋謙策氏、白澤政和氏、牧里每治氏）

センターの7大活動内容

1. 国際講演会
2. 国内講演会
3. 院生の海外FW支援
4. 研究プロジェクトの推進
5. 「理論と実践の好循環をめざして」
6. ニュースレターの発行
7. 研究書の出版

1. 国際講演会

多く開催（資料参照）

GP期間中はヨーロッパ、アメリカからも。最近は韓国、中国が多い

2つの学部間協定－センターが窓口となって締結

1) 韓国・中央大学：これまで6回韓国と日本で開催、**院生の英語での報告**（2010.3, 2011.6, 2013.2中央大学、2010.6, 2012.11, 2016.11同志社大学）

2) 中国・華東理工大学：博士号取得者が講師として就職

国際講演会 (1)

日付	名前	所属	
2007.11.9	林卡 周 曉虹	南京大学	
2008.1.25	詹 火生	国立台湾大学	
2008.3.12	D. Lee, J. Bradshaw, P.G. Edebalk 宋 鄭府	Loyola Univ. Univ. of York Univ. of Lund 尚志大学	
2008.3.22	J. F. Handler	UCLA	
2008.7.28	金 淵明	韓国・中央大学	
2008.12.13	D. Lee P.G. Edebalk	Loyola Univ. Lund Univ.	
2009.1.31 共催	テリー・ミズラ ヒ ヨシー・コラジ ム＝コロシー	ニューヨーク市立 大学ハンター校 イスラエル社会省	

国際講演会 (2)

日付	名前	所属	
2009.5.16 共催	王 崢 畢 麗傑	大阪経済大学院生 立命館大学院生	中国社会福祉研究会
2009.6.11	Ava Bronberg Casey MacGregor	UCLA院生 UCLA院生 (院生主体国際セミナー
2009.7.11	鄭 義龍 昊 明明	院生 (韓国) 院生 (中国)	院生主体国際セミナー
2009.7.18 共催	J. Bradshaw,	Univ. of York	
2009.9.26	章 曉懿 徐 永祥	上海交通大学 華東理工大学	
2010.3.25	Bruno Theret	フランス国立科学 研究センター	
2010.7.7	Duong Tran	Fordham Univ.	

国際講演会 (3)

日付	名前	所属	
2010.12.15			韓国延世大学社会福祉大学院との学術交流会
2011.3.7			北欧社会福祉国際講演会
2011.6.25 共催			中国 사회복지研究会
2012.1.9 共催	J. Bradshawほか ブリストル大学スタッフなど。		国立社会保障・人口問題研究所との共催 「子どもの貧困に対する政策を考える」
2012.3.3			青少年自殺－スウェーデン
2012.7.21	Richard Scotch	テキサス大学ダラス校	
2012.10.11	王 崢 徐 栄	江西農業大学 華東理工大学	流動児童と医療弱者

国際講演会 (4)

日付	名前	所属	
2013.7.24	陸 麗君	華東理工大学	
2014.3.1	何 文炯 王 海燕	浙江大学 瀋陽師範大学	
2014.7.9	Virginie Guiraudon	CNRS (フランス国立科学センター)	家事サービス
2014.11.6	Junko Yamashita	Bristol Univ.	Double Care
2014.12.22	趙 環 徐 栄 姜 妙屹	華東理工大学 同 同	
2015.1.13	金 テソン 李 ボンジュ	ソウル大学 同	
2015.6.28	ファン・ミョンジン ソ・ヨンソク キム・ユンテ	高麗大学 同 同	
2015.9.25 共催	V.ペストフ Y.バムスタッド	エーシュタ・シュン ダール大学	社会的企業、共同生産 (Co-production)

2. 国内講演会

より多く開催

一言で言って多様

例えば、大橋謙策、白澤政和、岩田正美、武川正吾などのbig nameから、院生主体小規模研究会、量的調査・質的調査の方法論研究会、エピソード記述、自殺の予防とケア、東アジアの福祉、英語でのプレゼンテーションの方法、若手の研究スタイルなど。

最近ではセンター長の意向もあり（?）、「子どもの貧困」、「生活困窮者自立支援」関係が多い。

⇒ 「センター開設10周年記念連続公開セミナー」

ポスター (1)

若手の院生・研究者(留学院生)の研究スタイル

みなさま
2015年度の日本社会福祉学会賞助賞受賞者は、同志社大学大学院社会福祉学専攻関係の2人の若手研究者が受賞しました。この受賞を機に、若手の院生・研究者(留学院生)の研究を側面から支援することをめざして、受賞者の研究アウトプットや日ごろの研究スタイルを紹介する機会を設けました。参加者が本書の議論を尽くすことで有益なサジェスションを得られることを期待しています。ふっってお集まりください。

同志社大学社会福祉教育・研究支援センター長 埋橋孝文

第1部 2015年度社会福祉学会賞助賞受賞者による解説 (司会:山村ワツ)
郭芳 (同志社大学留学生特任助手)
単著部門「中国農村地域における高齢者福祉サービス—小規模多機能ケアの構築に向けて—」(明石書店)
任貞美 (同志社大学大学院社会学研究科博士後期課程院生、学際特別研究員DC2)
論文部門「介護職員の虐待認識に基づいた高齢者虐待定義の再構築への試み—「準虐待」の構造と特徴に着目して—」(『社会福祉学』Vol.54-4)

第2部 若手(女性)研究者の研究スタイル—苦勞したことや工夫したこと— (司会:埋橋孝文)
三島亜紀子 (同志社大学社会福祉教育・研究支援センター嘱託研究員、2008年度社会福祉学会賞助賞受賞者)
山村ワツ (日本大学法学部助教、2012年度社会福祉学会賞助賞受賞者)
郭芳
任貞美

同志社大学新町キャンパス淡水館1階会議室
2015年11月21日(土)13時30分~16時30分
事前申込み不要・参加費無料

Do-ERC-SW 同志社大学社会福祉教育・研究支援センター
DOSHISHA UNIVERSITY Division of Education Research Center of Social Welfare

ケア労働日中比較研究会(主催)
同志社大学社会福祉教育・研究支援センター(共催)
中国社会問題小規模研究会

「コミュニティ」 「都市」高齢者サービスのあり方 —都市と農村の比較検討—

2015年5月6日 13:30~15:00
同志社大学新町キャンパス 淡水館 R412
参加費無料 申し込み不要

趣旨
急速な高齢化が進行している中国では、高齢化問題に対する整備が急務。中国現行の高齢者の養老体制を(1)無養老の社会(Community)養老(2)在宅養老に区分し、社區養老について、都市部の80%、農村部の90%で社區中心(Community Center)を設立する目標を立てている。都市と農村の「無養老」社会構造で、中国において、社區養老を立地する形でのコミュニティのあり方を検討する。

発表者
劉郭芳 (同志社大学大学院社会学研究科助手) コーディネーター
水野博達 (大原市立大学大学院創造都市研究科特任教員)

中国農村地域LIFE 高齢者福祉サービス
郭芳(著)「中国農村地域における高齢者福祉サービス—小規模多機能ケアの構築に向けて—」(明石書店)
本書は先行研究と事例調査を基に農村高齢者福祉の現状を分析し、日本の地域型型型福祉を参考にサービスモデルの構築を試みる。

Do-ERC-SW 同志社大学社会福祉教育・研究支援センター
DOSHISHA UNIVERSITY Division of Education Research Center of Social Welfare
問い合わせ E-mail: derc-sw@mail.doshisha.ac.jp

子どもの貧困へのアプローチと取り組み

公開セミナー
子どもの貧困/不利/困難を考える

2015年7月25日(土)13:00~16:30
同志社大学寒梅館203教室
事前申込み不要 参加費無料 受付開始12:30
主催:同志社大学社会福祉教育・研究支援センター

開会の挨拶:埋橋孝文(同志社大学)

Part 1
「貧困/不利/困難に負けない力(レジリエンス)」と自己肯定感
司会:矢野裕俊

1. 阿部彰(首都大学東京)
「子どもの自己肯定感の低下を防ぐ要因はなにか」
2. 小田川華子(首都大学東京)
「児童養護施設退所者の自己肯定感向上の契機」
3. 宮田暢子(堺市こころの健康センター)
「児童養護施設退所者の不利、困難、貧困を克服する手立て」
4. 田中弘美(同志社大学大学院)・埋橋孝文
「『正しい立ちの整理』にみる子どもの自己肯定感を高める支援
<質疑応答・ディスカッション>

Part 2
子どもの貧困への多様なアプローチ
司会:埋橋孝文

1. 室住真麻子(帝塚山学院大学)
「子どもの貧困と母親の就業と背景と」
2. 田中聡子(県立広島大学)
「反・子どもの貧困の実践から学ぶもの」
3. 山村ワツ(日本大学)
「児童養護施設で暮らす子どもたちと親のメンタルヘルスイシュー」
4. 室田信一(首都大学東京)
「アメリカのヘッド・スタート事業から考える子どもの貧困対策と教育」
5. 郭真福(ブル学院大学)
「民からスタートした韓国スタイルの貧困児童プログラム」
<質疑応答・ディスカッション>

開会の挨拶:矢野裕俊(武庫川女子大学)

Do-ERC-SW 同志社大学社会福祉教育・研究支援センター
DOSHISHA UNIVERSITY Division of Education Research Center of Social Welfare

ポスター (2)

中国社会問題小規模研究会

高齢者「医療・養老結合」モデルに向けての探索
— 中国上海を事例に

報告者: 養秀全
(華東理工大学社会公共管理学院准教授)

2015年7月8日13:00~14:30
臨光館412教室

使用言語: 中国語
(通訳付き)

趣旨: 人口高齢化の傾向がますます激化している中国では、医療衛生と養老サービスの結合の推進が求められています。本研究会では上海の事例を通して、上海の高齢者の健康状況、医療と養老に直面する課題および「医療・養老結合」モデルの実現に当たっての困難と行方を紹介しています。

セミナー
「子供の貧困問題—
解決策を考える」

日時: 7月30日(土)13:00~16:30
受付開始12:30
場所: 同志社大学 烏丸キャンパス
志高館112教室

参加費無料、申込不要

講師: 湯澤直美 教授(立教大学)
「自治体における子どもの貧困対策の動向」
小西祐馬 准教授(長崎大学)
「乳幼児期の子どもの貧困と保育」

主催: 同志社大学社会福祉教育・研究支援センター

同志社大学 社会福祉教育・研究支援センター
祝! 開設十周年記念連続公開セミナー
「ソーシャルワークの新たな展開」

どなたでも参加いただけます。
事前申し込み不要、参加費無料、
当日会場まで直接お申し込みください。
お問い合わせの上ご参加ください。

6月17日(土) 13:10~15:30
有田 朗 (アルファLink)
「生活困窮者自立支援—家計相談支援」
良心館413教室

7月8日(土) 13:10~15:30
橋浦 直子 (大阪市立大学)
「家計相談支援とソーシャルワーク」
良心館413教室

7月15日(土) 13:10~15:30
門田 光司 (久留米大学)
「子どもの貧困と学校ソーシャルワーク」
良心館413教室

7月22日(土) 13:10~15:30
石田 慎二 (帝塚山大学)
「子どもの貧困と保育ソーシャルワーク」
良心館413教室

8月5日(土) 13:10~15:30
行岡 みち子 (グリーンコープ)
「生活困窮者自立支援—家計相談支援」
志高館110教室

お問い合わせ先:
同志社大学社会福祉教育・研究支援センター事務局
(derc-sw@mail.doshisha.ac.jp)

- 3. 院生の海外FW支援
- 4. 研究プロジェクトの推進

3. 院生の海外FW支援（表参照）

GP終了後は年間3－5名
留学院生の経済的支援を兼ねる
報告をNLに掲載

4. 研究プロジェクトの推進（公募制）

1期（2007～2009）	6つのプロジェクト
2期（2010～2012）	7つ //
3期（2013～2015）	5つ //
4期（2016～2018）	4つ //

3. 院生の海外FW支援

2007	1	アメリカ
2008	7	アメリカ、オーストラリア、中国、韓国、ネパール
2009	10	アメリカ、カナダ、中国
2010	4	韓国、中国
2011	3	韓国
2012	4	中国、イタリア
2013	2	中国
2014	5	韓国、中国
2015	4	オーストラリア、韓国
2016	1	中国
2017	5	韓国、中国

第1期研究プロジェクト

テーマ	リーダー	
福祉でまちづくり in 京都	上野谷加代子	
福祉サービスとマンパワーに関する国際比較	埋橋孝文	
産業メンタルヘルスにおける自殺予防	木原克信	
福祉専門職におけるキャリア形成	小山隆	
実習教育研究プロジェクト	空閑浩人	
介護保険制度における要支援ケース・・・	山田裕子	

第2期研究プロジェクト

テーマ	リーダー	
「アクションリサーチをととした地域の福祉力開発」	上野谷加代子	
自殺予防プロジェクト	木原克信	
「地域包括支援センターの機能の研究：社会福祉士へのインタビューから探る」	山田裕子	
「社会福祉実践を担う専門職の育成・支援に関する研究」プロジェクト	空閑浩人	
若手ソーシャルワーカーの現任訓練プログラムの構築と実施 (本学社会学部社会福祉学科の卒業生支援プログラム)	野村裕美	
「児童・高齢者・障害者の各社会保障関連施策に関する国際比較研究」	永田祐	
「中国の社会保障と社会福祉に関する研究」	埋橋孝文	

第3期研究プロジェクト

テーマ	リーダー	
被災地におけるアクションリサーチの展開	上野谷加代子	
応用統計分析研究会	埋橋孝文	
社会福祉教育・研究における「エピソード記述」の展開	森口弘美	
「実践家に何を問うかー対話をベースにした現認訓練プログラムの構築と実施」	空閑浩人	
地域包括支援センターを中心に展開する高齢者ケア	山田裕子	

第4期研究プロジェクト

テーマ	リーダー	
一人暮らし高齢者の社会参加と社会的包摂：日本とフィンランドの国際比較	山田裕子	
グラフィック・イラストで学ぶ社会保障－東アジアの視野で考える	埋橋孝文	
社会福祉実習教育に関する研究プロジェクト	空閑浩人	
定例カンファレンス：アドバンスト・プログラム企画プロジェクト	野村裕美	

3つのプロジェクトによる出版

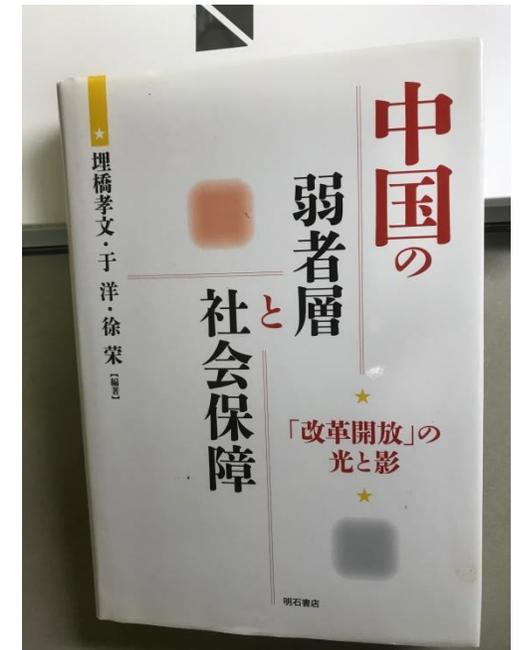
1. 「事例研究研修プロジェクト」・「実習教育研究プロジェクト」共同出版
空閑浩人編『**社会福祉専門職の養成と支援－「ソーシャルワーカー論」の展開－**』
(ミネルヴァ書房, 2012年11月)

2. 自殺予防プロジェクト出版

木原活信・引土絵美共編『**自殺をケアするということ：『弱さ』へのまなざしからみえるもの**』 (ミネルヴァ書房、2015年6月)

3. 中国社会保障プロジェクト出版

埋橋孝文 (同志社大学) ・于洋 (城西大学) ・徐栄 (華東理工大学) 共編
『**中国における弱者層と社会保障－「改革・開放」の光と影**』
(ミネルヴァ書房, 2012年5月)



5. 「理論と実践の好循環をめざして」

- 事例研究・研修プロジェクト

- 「理論と実践の好循環をめざして」、学部・院のOB、OGの再教育を兼ねる

- ケース・カンファレンス連続講座、スーパーバイザー養成講座などを精力的に実施（○准教授担当）

- 現在は「定例カンファレンス」を定期的に開催（含・ケアカフェ）。詳しくは下記URLを参照ください。

- <http://gpsw.doshisha.ac.jp/index.html>

6. ニュースレターの発行

年2回発行（GP期間2007～2009年度は1回につき2号発行、2010年度以降は1回につき1号、現在は26号まで）

11号（2010年7月）～17号（2013年9月）は表紙と裏表紙だけがカラー、それ以外はフルカラー

1回の印刷費用20～30万円、発送費用8万円

内容：①セミナー報告、②海外FW報告、③研究プロジェクト報告、④書評、⑤博士学位論文を執筆して／博士学位を取得して、⑥就職して／授業を担当して、⑦学術奨励賞を受賞して、⑧院生自己紹介、カリキュラム改正をめぐって大学院生の意見、その他

記事の大部分は院生が執筆

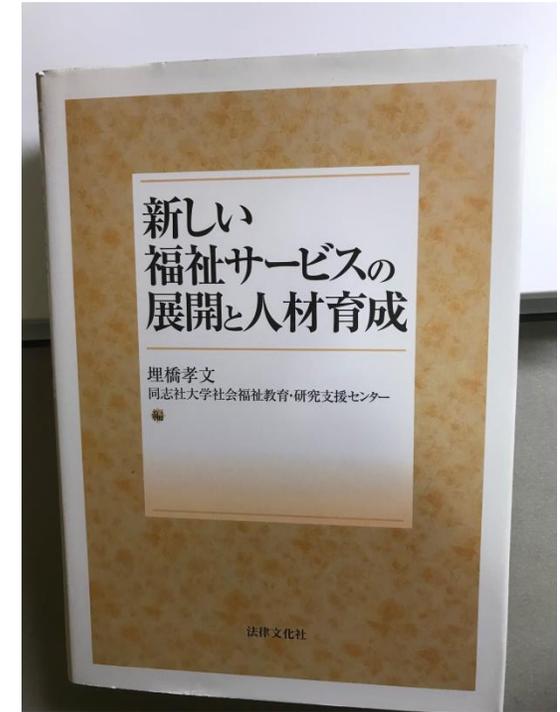
7. 研究書の出版

- 1) 埋橋孝文 + 同志社大学社会福祉教育・研究支援センター編
『新しい福祉サービスの展開と人材育成』
(法律文化社、2010年3月)

👉研究プロジェクトをもとに編集 (大学院GPの勢いと成果)

- 2) 埋橋孝文 + 同志社大学社会福祉教育・研究支援センター編
『ソーシャルワークの新たな展開 - 貧困と生活困窮者支援 (案) 』 (仮題、法律文化社、
2018年春～夏刊行予定)

⇒2017年度開催の「センター開設10周年記念連続セミナー (ソーシャルワークの新たな展開)」の5人+1人の講演をもとに編集👉セミナーをもとに編集



『貧困と生活困窮者支援－ソーシャルワークの新展開－（仮題）』（1）

はじめに 埋橋孝文

1章 問題解決しない支援－困窮者支援における伴走支援とは？

奥田知志（東八幡キリスト教会牧師、NPO法人包樸理事長、ホームレス支援全国ネットワーク理事長）

－伴走型支援をめぐる

1) 高橋尚子（一般財団法人京都自立就労サポートセンター主任相談支援員）・郭 芳（同上センター元相談支援員・就労支援員、同志社大学社会学部助教）

2) 野村裕美（同志社大学准教授）

2章 生活困窮者自立支援－家計相談支援

行岡みち子（生活協同組合連合会グリーンコープ連合常務理事・生活再生事業推進室長）

3章 生活困窮相談における家計相談支援

有田 朗（一般社団法人アルファリンク代表理事）

『貧困と生活困窮者支援ーソーシャルワークの新展開ー（仮題）』（2）

4章 家計相談支援とソーシャルワーク 鵜浦直子（大阪市立大学大学院生活科学研究科講師）

5章 子どもの貧困と学校ソーシャルワーク 門田光司（久留米大学文学部社会福祉学科教授）

6章 子どもの貧困と保育ソーシャルワーク 石田慎二（帝塚山大学現代生活学部こども学科准教授）

7章 現在の論点と争点

1. 生活困窮者・家計相談支援をめぐる

1) 櫻井純理（立命館大学教授） 2) 垣田裕介（大分大学准教授）

2. 学校・保育ソーシャルワークをめぐる

1) 田中聡子（県立広島大学教授） 2) 倉持史朗（天理大学准教授）

- 執筆者紹介
- あとがき 埋橋

センターの予算と事務局

- 予算（口頭で概略をお伝えします）
- 大学特定予算＋大学教学充実費＋社会福祉学科開設募金から
外部1000部 学部生500部 学科OB, OG500部 📄NL配布

<http://gpsw.doshisha.ac.jp/index.html>

- 事務局 センター長＋アルバイト事務局員1名（これまでで3人、すべて中国からの留学院生）、事例・ケース・カンファレンス担当1名

センターの意義と役割 = 大学院の教育・研究を側面／背後からサポート

1. 院生に最先端の情報を提供（国際セミナー、国内セミナー）
2. 院生の基礎的なリサーチ能力を育成（量的、質的分析、英語によるプレゼンテーション）
3. 院生の海外リサーチを経済的に支援
4. ニュースレターでのセミナー報告、書評などの執筆経験を付与
5. 院生自身の研究オルガナイズ能力を育成（院生主体セミナーの開催、研究プロジェクトに入ってプロジェクトの「回し方」を経験） ⇒ 自殺とケア、エピソード記述、子どもの貧困、応用統計分析
6. 学部・大学院卒業生の再研修とスーパーバイズの間を提供（事例ケース・カンファレンス）、 「理論と実践の好循環」

最後に

- 豪華なディナーとお茶漬け（教員の自己満足を避ける）
- 全国の大学のCOEの経験の反省 = サステナビリティの重視 ⇒ 「無理をせずに、楽しみながら」センターを運営
- 学内資金と競争的学外資金（含・科研）を組み合わせて
- 「院生本位」 「すべては優れた修士論文、博士論文の完成のために」